

のあざけりの言葉によって成就したのです。また、マタイは「**道を行く人々は、頭を振りながらイエスをのしって……**」(付点付加)と、人々の言動においても預言がいかに正確に成就したかを描いています。15節は、冒頭に引用したヨハネの福音書からの聖句に描写されているように、十字架上で瀕死のキリストがのどの渇きを訴えられたことにより、成就したものでした。1節と同様に、聖書に預言されたことがユダヤ人のメシヤ、すなわち、ご自分において成就したことを明らかにされたものでした。ダビデによる他の詩篇「**彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、私がかわいたときには酔を飲ませました**」(69:21)は、キリストの十字架刑において成就したいっそう明確な預言でした。17、18節は、ゴルゴダの丘では、イエスを十字架につけた後、くじでイエスの着物を分けたり、見張りをしていた者がいたというマタイの記述によってやはりその通り成就したことが分かりますが、ヨハネは冒頭に引用したように、この出来事をさらに詳細に描写しています。

ヨハネはさらに続く聖句で、兵士たちが、死刑囚がもはや立ち上がって息ができないように、イエスと一緒に十字架につけられた二人の者のすねの骨を折ったこと、しかしイエスはすでに死んでおられたので、すねを折らず、わき腹を槍で突き刺したこと、そのとき「**ただちに血と水が出て来た**」ことを目撃したと記しています。

この心臓からの血の分離は、奇しくも、後世解明された死後の現象を証しするもので、キリストの死が仮死とか、粉飾死ではなかったことを明確にする記述となったのです。また、キリストの骨が折られなかったことは、「**主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、くだかれることはない**」(詩篇34:20)や「**過越のいけにえの骨を一本でも折ってはならない**」(民数記9:12)を成就するものであったこと、すなわち、キリストこそモーセの掟を全うすべく、「いけにえの子羊」として死んでくださった救い主であったことを明らかにしているのです。

遠大なご計画の中で神は、メシヤが地上に来られるはるか前に、ご自分の契約の民に掟を与え、未来の約束をされ、それらを成就するのが、来るべきダビデの血筋のメシヤであることを示してこられました。確かに、神が送られたユダヤ人のメシヤ、イエス・キリストにおいて、今日すでに多くの預言が成就しています。ご計画を遂行される神の驚くべき備えをうかがい知ることのできる一つの例を挙げてみましょう。神の靈感によって記された聖書には、無駄なことは何も書かれていないこと、一字一句、すべてに意味があることが分かります。

民数記27章、36章には、神の民が出エジプト後、いよいよ約束の地カナンに入る直前に新たに掟が加えられたという興味深い出来事が記されています。男兄弟のないマナセ族のツェロフハデの娘たちが、約束の地で自分たちにも相続地を与え、父の名を継がせてほしいという訴えをモーセにしたのです。モーセは主に伺いを立て、主が下されたお答えは「**ツェロフハデの娘たちの言い分は正しい……彼女たちにその父の相続地を渡せ**」(民数記27:7)で、息子のいない人は娘に相続させることができる新しい掟が命じられたのです。しかし、もし娘たちがマナセ族以外のイスラエルの部族の者と結婚した場合、彼女たちの相続地が結婚する部族の相続地に加えられることになり、マナセ族の相続地が減るので、部族間に割り当てられた相続地が保たれるためには、父の後継ぎになる娘たちは父と同じ部族の者たちと結婚しなければならないという条件をつけることが、部族のかしらたちによってさらに訴えられました。主はマナセ族の訴えはもともとであると答えられて、「**イスラエル人の部族のうち、相続地を受け継ぐ娘はみな、その父の部族に属する氏族のひとりにとつがなければならない**」(36:8)ことが、追って定められたのです。凶らずも後世、モーセが神の権威ある掟と認めたこの掟がなければ、意味を成さない系図が新約聖書に登場することになります。ルカの福音書に記されているマリヤの系図です。

まず、マリヤの系図が、キリストの系図として成立するには、上記の特例によって、マリヤが男兄弟のない、父の名を受け継ぐ娘であったことが条件になります。冒頭に引用したヨハネの記述は、キリストの十字架刑を真近く見ていたのが「**イエスの母と母の姉妹**」(付点付加)であったことを明らかにしています。カトリック百科事典や『ヤコブの原始福音』と呼ばれる書ほか、数知れない聖書外典もマリヤに兄弟がいなかったと記しています。また、掟に従えば、マリヤは父「ヘリ」(ルカ3:23)と同族の氏族の息子と結婚しなければならなかったこととなりますが、マタイの福音書に載せられたイエスの義理の父ヨセフの系図と、母マリヤの系図とが先祖がダビデであるという点で、どちらもユダ族であったことが、明らかになるのです。父ヨセフの系図が、「エコニヤ」への呪いのゆえに王位に就く者がいないと預言されていたにもかかわらず、ダビデの血筋の王メシヤの系図として、福音書に父方と母方の両方の系図が載せられた背後には、このような神の配慮があったようです。

父ヨセフは、イエスが十二歳以降福音書に登場していないことから、早死したことが考えられます。子連れの未亡人は、父か兄弟の許に身を寄せるのが慣習でしたが、もし父がすでに亡くなっており兄弟もいなければ、息子の一人が面倒を見ることになっていたのです。実際、年長のイエスは当時のユダヤ人の慣習に従って、幼い兄弟姉妹の面倒を父親代わりに見なければなりません。イエスが、家業の石工から天の父なる神の働き、福音宣教に移られたのが三十歳過ぎであったことは、このことを裏づけているようです。したがって、イエスの兄弟姉妹がまだ母マリヤの面倒を十分に見ることができなかつたため、イエスは、最後までイエスのそばにいて十字架刑を真近く見届けた唯一人の弟子ヨハネに「**そこに、あなたの母がいます**」と、マリヤの世話を依頼し、母マリヤにも「**そこに、あなたの息子がいます**」とヨハネの許に身を寄せるよう指示されたのです。